

| | | |
|---------|---|------------------------------|
| 氏名 | 張 小龍 | |
| 学位の種類 | 博士（美術） | |
| 学位記番号 | 博美第25号 | |
| 学位授与年月日 | 令和4年3月25日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当者 | |
| 題目 | 学位論文題目 | 個体から現代社会のプロフィールを描く—私、矛盾、壁— |
| | 研究作品題目 | 1. 《排水溝 - 天》 2. 《排水溝 - 地》 |
| 論文審査委員 | 主査教授 阿野 義久 副査教授 神田 每実 副査教授 小西 信之 外部 豊田市美術館 審査委員 学芸員 鈴木 俊晴 | |

1 学位論文の要旨

本研究のテーマは「個体から現代社会のプロフィールを描く—私、矛盾、壁—」である。タイトルの「個体から現代社会のプロフィールを描く」は筆者がこれまでずっと表現してきた主要なテーマである。

本論文で言及している「個体」は副タイトルに書いてある「私」を指している。人間社会は無数の「個体」からなる集合体であり、「個体」は、個人に関わっているすべての物事の集合体である。よって、タイトルの「個体から現代社会のプロフィールを描く」は、「私」に関わっているすべての物事から現代社会のプロフィールを描くことを意味している。

博士後期課程以前の段階は筆者が周りの事物に注目して、事物の「現象」を表現していたものであれば、現在制作を進めている「矛盾、壁」と題するシリーズではそれらの事物の現象を通して、事物の本質である核心に至ったのである。どの段階でも「私」は、この現代社会を体験している個体として、現代社会のプロフィールを描いている。

副タイトルの「私、矛盾、壁」は、筆者が各段階で制作した作品の内容であり、大学学部生から今日に至るまで継続してきた「周りの物事を表現する」という創作テーマを引き継ぐものである。「私」「矛盾」「壁」はそれぞれ論文の第1、第2、第3章に書かれており、時系列に従って、筆者の絵画のテーマが過去から現在まで経験した三つの段階に対応している。第2章の「矛盾」は第1章の「私」の続きで、そして第3章の「壁」は第2章の「矛盾」の続きということである。

「私」とは、現代社会に生きている個体としての私が周りに存在している様々な事物を表現することによって、側面から現代社会の容貌を描いている。

「矛盾」とは、私の周りに存在している事物の本質的なものである。「矛盾」は事物の中身にあり、「矛盾」を表現することは事物の本質を表現することである。

「壁」とは、作品の中で「矛盾」という概念を実体化して表現する具体的な対象であり、筆者が表現している「矛盾」の実体である。

本論文は筆者の絵画が具象的写実から平面的な表現へと変化したことから始め、第1章にて、筆者が博士後期課程に入る以前に制作した幾つかのシリーズ作品について論述する。第1節の1から5まではそれぞれ「周りの動物」「周りの神様」「周りの友達」「周りの建物」「周りの自転車」この五つのシリーズ作品について述べている。これらのシリーズ作品はまた、一つのシリーズとして、〈周りの物事〉という大きいテーマになっている。筆者はこれらの身の周りにある物事に注目して表現した上で、ついに物事の現象を通して、中に隠されている「矛盾」に気づいたのである。

第2章は「矛盾」についてであり、第1章の最後で論述した「周りの自転車」で提議した「矛盾」というテーマの継続である。この段階の筆者の絵画は物事の矛盾点を表現しているとは言え、画面上に「矛盾」、「衝突」、「違和感」などを表現するわけではない。逆に、筆者の作品では「調和感」、「安定感」の方が明らかに見える。

筆者に対して、「矛盾」そのものは画面を構成する要素だけだ。筆者が作品を制作した時一番気になっているのは「絵画」そのものであり、作品の内容を決めた後、頭の中は画面構成のことしか考えないのである。画家が作品を制作する時、自身のイデオロギーを伝えることと自分の審美眼に合う「美の在り方」を表現すること、この両者は共存することが可能であり、決して互いに衝突するものではない。画面に描く要素が善であれ悪であれ、美であれ醜であれ、全て「美しく見える」という基準に従って表現するのは筆者が持っている原則である。

第2章第1節は筆者が「矛盾」というテーマを表現し始めたことについて述べている。第2章第2節は筆者が「矛盾」というテーマを巡って制作した作品についての論述である。そして第2章第3節で、矛盾している事物の間関係によってそれぞれ「調和」、「不安定」、「不調和」この三つのタイプにまとめて述べている。

第3章のテーマは「壁」である。「壁」は、本研究のテーマ「個体から現代社会のプロフィールを描く」の一番重要な内容である。筆者の創作の中で、壁は、人間社会と自然界この二つの生存空間を隔てる境界線を指していて、「矛盾」という概念を実体化する一つの表現法である。

壁の最も基本的な用途は空間を隔て、人為的に「壁の内側」と「壁の外側」この二つの相対的な概念を作り出す。一旦壁を作り出すと、「内側」と「外側」この二つの相対した概念が同時に生まれる。壁の両側は、矛盾という概念が含んだ二つの矛盾し合う対象と同じように、どうしても融合できない関係である。

よって、壁は、もとより矛盾の特徴を備えていると言える。

なぜ「壁」という概念を表現するのかというと、対象と対象の組み合わせで生み出された矛盾は、何と言っても抽象的な概念だから、直接肉眼で見られない。しかしこの概念を物質化し、モノ化して、壁という対象で表現すればわかりやすいのである。よって、第3章のテーマ「壁」は第2章のテーマ「矛盾」の続きとして、矛盾を表象する実体である。

2 学位論文審査の要旨

【論文】

『個体から現代社会のプロフィールを描く—私、矛盾、壁—』

本研究は、絵画の社会的な意義と美の普遍性について、申請者(張小龍)が自らの制作を振り返りつつ、分析、考察した絵画創作論である。

申請者は留学生であり、日本から母国中国を振り返った時にあらためて立ち現れた歴史問題を俯瞰し、客観的に世界全体の矛盾に目を向けることから絵画の再考を始めた。芸術は社会思想を作品に含み鑑賞者に伝えることに魅力があるとして、申請者は絵画における画家の社会思想と美の在り方の共存を目指し、画面構成の重要性を訴える。

申請者は博士後期 1, 2 年次において徹底的に絵画の要素、概念に関する知識を研究した。造形言語について、すなわち色彩の視覚効果の役割、構図と作者の意図の関係、西洋の物体の際としての線の解釈と東洋画の写意の解釈の違いなど。これら諸要素の言語的探究は彼の審美を確かなものとし、自己の絵画を分析し独自の絵画理論を展開することを可能にした。

タイトルの「個体から現代社会のプロフィールを描く」は申請者がこれまでずっと表現してきた主要なテーマである。申請者は、「個体」という言葉の比喩として「ユーザー」という言葉を用い論じている。それはこの言葉が、個体という哲学的な思考を感じさせる言葉よりも、現在のような消費社会の特徴と現実味をもって結びつくと感じるからである。本論文で言及している「個体」は副タイトルに書いてある「私」を指している。「個体」は、個人に関わっているすべての物事の集合体である。よって、タイトルの「個体から現代社会のプロフィールを描く」は、「私」に関わっているすべての物事から現代社会のプロフィールを描くことを意味している。

副タイトルの「私、矛盾、壁」は、申請者が各段階で制作した作品の内容である。「私」とは、現代社会に生きている個体としての私が周りに存在している様々な事物を表現することによって、側面から現代社会の容貌を描いている。「矛盾」とは、私の周りに存在している事物の本質的なものである。「壁」とは、作品の中で「矛盾」という概念を実体化して表現する具体的な対象であり、筆者が表現している「矛盾」の実体である。

「壁」は、本研究のテーマ「個体から現代社会のプロフィールを描く」の一番重要な内容である。申請者は、どの段階においても、現代社会を体験している「時代のユーザー」として、現代社会のプロフィールを観察し描いていることを論じている。第一章は絵画の様式、表象の展開である。第二章は表現することの意義、社会思想に関する試行について論じている。第三章は現代美術の時効性を問題として絵画の在り方について論じている。絵画は日常の気づきから人の感情を想起させる表現を取り入れることで芸術の持続性が保持されると説いている。とりわけ、「矛盾」「壁」をテーマとして創作された絵画は、「現代社会全体と個の生存」について切実な問いかけに繋がるものとなっている。社会の「矛盾」を描くことは申請者が絵画という媒体で現代社会の側面を表現し、伝播することを目的とするものであり、「壁」を描くことは日常に存在する矛盾双方を表現することで人の相反する感情を描いている。

この論文は芸術家、とりわけ美術家を志す者が直面する制作物の時効性の問題について、自らの制作過程と E. H. ゴンブリッチの美術論を紐解きながら、極めて高い説得力のある結論へと導いている。実作品を重ね合わせて論ずることは直面する問題の切実さを言語化し表現の偶然性を極力排除した理論の構築が表現の質の担保に繋がることを証明した。そして現代美術の役割としての社会思想の組み込みと新しい表現様式の採用は、「今」という

時効性を持つが、一方で芸術は普遍的な美を伝えることによって持続性を持ち時代を経ても残っていくということを、申請者は自らの作品制作過程を通じて論じたのである。

以上により本論文は独自の創作の問題点に特化し、その制作過程を分析して段階を積み上げた制作絵画と一体化した創作論として高く評価できる。

【作品】

1. 《排水溝-天》 キャンバスに油彩 H1550 mm×W2800 mm×D37 mm
2. 《排水溝-地》 キャンバスに油彩 H800 mm×W3600 mm×D37mm

《排水溝-天》は排水溝の底から上を見たときの構図を表現しており、障害物の視点から出発し、作品の前に立っている鑑賞者はまるで壁の反対側に身を置いているような感覚になる。《排水溝-天》の作品の中で、鑑賞者はまるで底が見えない真っ暗な深淵の中にいるような感覚になっており、頭上にある近いが永遠に届かない天を見上げている。深淵の中にいる鑑賞者がどれほど陽の当たる場所を切望しても、陽の当たる場所にいる人はこれに対して関心がない。なぜかという、おそらく陽の当たる場所にいる人は同様にもう一つの深淵に身を置いており、離れられないからである。

《排水溝-地》は逆方向からの視点を表現している。それは私たちが日常生活の中で接触する最も多くの観察方法であり、いわゆる「俯瞰」である。排水溝シリーズ作品の内容は依然として「壁」のテーマを引き継ぎ、蓋によって隔たれた地上と地下。この二つの空間を表現することを通じて、矛盾問題を実体化した対象「壁」を表現している。《排水溝-地》の作品の中で、鑑賞者は日常の視点に立っており、頑丈な金属製の蓋を通して中の暗闇の空間を見ている。これらの障害物にとって、自分の上に立っている私たちは陽の当たる場所において、それは即ち私たちがそれらの障害物の天である。

今回審査対象の絵画2点については論文第3章「壁」、第2節「壁」を表現する絵画、作品論述一〈排水溝〉シリーズで論じている。博士後期課程において集大成となる絵画である。この絵画(研究作品)で筆者は個人の日常の中に存在する「矛盾」について「壁」という構造を利用して鑑賞者が感受することに成功している。とりわけ絵画の平面化を推し進めてきたこと、オブジェクトとリバー空間の二つの構造に絵画を分解し、要素を限定して取り組んできた成果といえる。特に《排水溝-地》の絵画は造形言語を極力制約したシンプルな構図により、イメージの伝達、とりわけ視覚的臨場感を生み出すことに成功した。提出された2点の絵画は現代社会に生きる我々に「生存」という意識を改めて投げかける秀逸な絵画である。

【口頭発表】

論文の要旨と研究作品の関連についてパワーポイントを用いて簡潔に明瞭に口頭で述べた。作成されたパワーポイントは要点が整理され作品画像と関連付けて説明された。個体が事物の本質に迫る中でその普遍的な意味に気づき、表現の深みへと還元してゆく過程は博士課程における研究の大きな成果だったと認められる。以上のように、申請者(張小龍)はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

審査員の評価は以下のとおりである。

○特に評価すべきは、論文と作品の関係が大変密接であり、共に研究が進んだことである。

作品について語ることから始め、本題からそれることなく問題を掘り下げることによって制作と論文の一体化が出来たことは大きな成果であり、理論の構築により精査された絵画は画面から安定的な要素を排除し画面の緊張感とイメージの無限の広がりを得た。作品が理論と目的で成り立つことを証明している。

○申請者(張小龍)の絵画には仕掛けがあり、それは陰と陽であり、善と悪の判断である。それは古くて新しいといえる。単純ではあるが単純であるがゆえに制作者の考え以上の表現が成立している。また、現実の中に矛盾を見つけることが独創性に繋がっている。

○論文は斬新ではなくスタンダードな内容となっている。私、「個体」が社会の現象としての私を描く。それは極めてリアルな私と社会の関係であり、矛盾から絵画で美として表現する。そして伝え感受する仕掛けは美術・芸術の持っている力であると訴えている。

○絵画表現の本質について制作の過程からイデオロギー、社会思想や普遍性と恒久性、時効性と持続性、これら浮かび上がる諸問題に対して思索を重ね個体という結論を得た。これにより違うフェーズに入ったことが理解できる。次の課題としては壁と向き合い自分の関心に従って描いていくのみである。今後の創作活動が大いに期待できる内容となった。

3 最終試験結果の要旨

最終試験は、愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士後期課程の学位授与(課程博士)の博士論文等審査基準に照らして、申請者(張小龍)の提出論文と研究作品が令和3年7月30日(論文予備審査)と令和3年11月9日(研究作品予備審査)に行われた予備審査会に提出され了承された論題及び形式、内容ともに合致しており、またその際に指摘された事柄に基づいてさらに発展させ、完成されたものであることを認めた。

提出された論文「個体から現代社会のプロフィールを描く一私、矛盾、壁」は申請者が芸術創作に従事して以降の創作テーマの内容の変化に沿って構成されている。申請者は博士前期課程で絵画の表象について研究を始め、絵画の平面化、簡略化を行っている。博士後期課程に進学してからは創作した絵画の意義と表象の関係について論じている。初期段階ではオブジェクトとリバース空間の異質な組み合わせを試みて妄想ともとれる独断的な絵画を展開させた。現代社会に焦点を当て、描く内容について考察を重ねながら徐々に事物の背後、内部に隠されている人の生存に関する本質的な感情に注目するようになる。これらの概念的な内容を具体的なイメージのある対象へて転化し、最終的にキャンバス上での表現に至る過程とその過程における思考の進展を説明したものである。

また、段階的に異なる時期に創作した作品の内容を時間に沿って論述すると同時に申請者自身の考えや学習したものを全体的に整理し、まとめた創作論である。

この論文は一つの定点から日常を述べたものではなく留学生である申請者が定点を移行したことで世界を俯瞰し、グローバル化の中に潜む矛盾を認識するに至った。その過程で個体の周りの事物を考察することから矛盾したストーリーを発見し、日常の裏に潜む共生と分断をテーマに人の感情の矛盾を表現するに至った。そして個体は時代のユーザーと位置付け芸術は個体のみが存在すると定義して理論展開を行っている。

博士研究作品はこうした日常の中に壁を発見することから分断された世界の社会の日常の明とその裏側に存在する暗、その双方を描くことで感情を表現した。

博士審査作品《排水溝一天》《排水溝一地》〈排水溝〉シリーズ作品は横長の構図であり、

深い視覚の効果と、創作テーマに対して明快な表現となっている。排水溝の空間に密集して並んだ抽象的な人の形の障害物は同様に構図の変化によって、表現上の変化を発生させた。日常何処にでも存在する極ありふれた側溝の風景を題材としているが、画面からは誰もが経験したであろう心情を想起させる。それは絶望と希望という感情である。以前のシリーズ作品と比べ、より簡潔で抽象的になり、複雑で多元である。

筆者は論文と作品を弁証法と社会学この二つの方面から理論的に検証し展開させた。自分の創作を振り返りながら研究制作が周辺の事物と現代社会に潜む矛盾を結びつけ、現代美術の時効性について「私」を表現することで芸術としての普遍性を持たせることが可能であると結論づけた。その普遍性は個体が時代のユーザーとして現代社会のプロフィール描くことであり、内容を整理して論述することを通し今後の絵画創作と理論研究の方向性を得られた。同時に研究内容が他者の研究に一定の参考材料になることを期待できる。

7月に行われた論文予備審査時の論文の状態では完成まで持っていけるか心もとなかった。しかし、栗谷佳司『音楽空間の社会学 - 文化史における「ユーザー」とは何か』（青弓社、2008）E. H. ゴンブリッチ『美術と幻影：絵画的表現の心理学的研究』（瀬戸慶久訳、岩崎美術社、1979）E. H. ゴンブリッチ『美術の物語』天野衛ほか訳、ファイドン、2007）などの研究を行い彼自身の制作の立ち位置を明確にして理論展開を進めることができた。論文を単独で評価すれば内容についてはやや常識的で新しく独創的だとする内容は当たらないが研究作品の独創性が高度な研究であることを裏付ける理論として広く一般の参考になると評価できる。これらの理由から審査委員一同は、愛知県立芸術大学大学院美術研究科の学位授与（課程博士）の博士論文審査基準（ディプロマ・ポリシー）に照らして、本申請論文及び研究作品が基準に達し、優秀であることを認め、博士学位に相応しいものと高く評価した。